玉敷神

二

へ遠13
984
2

遠門
號 984
巻 2

嘉書伊

第二回

煩悩を解説話

知光同塵ハ結縁のそとゝ

遂ゝ行。道とい兼く知るべし。昨日今日とい思いぎりゝる

されば惜むは甲斐なき。幼化の多を捨ゝ。修ゝ〳〵益ある

菩提の道を求めざるや。諸行無常の世のあり方。老とあく

若紀とあく。定めがたい命ゝ。佛のおゝえを絶ゝ〳〵無

智。文盲の人の心を和合ゝ。これよ捨きるのほと。天下

許免のひろるよゝ。ゝ〳〵佛法繁昌ゝ〳〵。其所も伝

山田屋佐助
書林

法彼和尚の法筵と。念佛の同行。膝を接して。題目の講中。氣違ひの如く。手の舞ひ足の踏所もなく。ちら宗意を傾きて。爰は鎌倉桐ヶ谷の。利德屋萬助の念仏の御同行なれば。今年もかつて。報恩講の御取越として。十月の中旬。日を究てぞ出でたる。暑六ッどもより。系統の人追ひくよ来る。男は小微肩衣を引掛け。女は角の隱しの帽子をいただき。先は立て利德屋の。門を開内へ這入り。意義の慈相な。耳ばたらの姥。孫

らしき。十三の娘を引連て。[ぞ]コレ北念や。一度りのところ遠く行かうぞ。よく礼を附て。孟ヨ杖も一緒よ去て。孟ヨ桃灯をぶら下げ。手持て居ろヤレ〳〵。あゝあぶなかろ〳〵。トいへば上り口のいきふ出しとあるよ。俗あく。ドウコイ。みサアり〳〵。お彩ん。ほをあいひ口をたくぎそようぎで一ツ。まい来ヤト。孫をひき連き。御内仏の孟へ居り。懐中ら数珠を出し〳〵。そろと。毛氈のいきく。孟。あむあぶぶつ〳〵〳〵〳〵。いきのをとげてのち。万吹が。今晩は。孟がふぐろまい。[ら]ようこそ。女ぶつあるくよむくひと。和まいりあされまし〳〵。[ぞ]かたらをとりて。本山さんの。ぶさん

おーむさん。おさきにごぎうまさ【去】それも六十ヨヤおへさん
かえ。よくおまいりあさろさ。後でくあげやうと思さが契あを
さんがお連があひと。我ら兵さらら一緒よ来ぶ【之】ヒさーや
いろども。お念をつまて来ぶら。連いぶぬのサ【連のぐこれの】【月ぐく六十ぐり】【ぐ】
ようおまいりあさんまーさ。さーもお連がふくべ。ふ系と
我ろさら。丁ど共おでさんが。ふくとくさらぐ系りまさ
手ぐ系ちやや。りふ夜ハ出られません【之】何おろくさん。ろく
むし者の方が連者でござりまん。今の系ひりのア。ぶんな

懶惰ござりません。あむあぶぶ〳〵。ぶぐお寺さぶハ
我ぶくさふさぶぬの【去】アイもぐサ。整と来ぶがちやろさョ
【之】ぶんわらけのられべ。おーむさんも能お姪子ぐ系さそふ
だ行くおやぐさふぐざりまん【去】さーうサ。存じの通りの
放湯形ぶぐら。尻のあち府ぶ系ようーの
るりで。貫ひいらひまさぐ。人さぶあやア。いまませんが私の
つぶ丸躾サ【之】令郎さんの氣よさく入まべ。そぐろでも。
不簡ちあさるがい。ぶさーあぶも椀をろて。ぶくぐ

あるが。世話の焼けさんざのふ。その癖よ。懶惰で子
いくぶやア行くなら共用もあんまりざからコレおゝ獨ア
分で居るうちハまだでも辛むが。今ふ子でも出来て。ア系
せんあるくそんな悠寛るのおやア。身上い持れぬチヤト動
働きもせんト。ゑまれ口をいくまゝこのサ。いのサ。ゑまれ
口も。分上のあるをいふのダケれど。今の若くものア。悪角それ
を扁屈と思ふあんこまりきりまゝ。共お念がおふくろ
どのあるでも。矢張そのとりサめつこ。やらむあるふ子

子をとり拵らくるもの。初者でやんふいくぶやア。どうま
せん。ふ子あるぶアうこゝ。丸きり育てあるさハナ。おまど
さるゝ。ホシニよハおまんぶやア。お義ッへ。ハイ土でどうまも。
ちぶくよ姉が一人ごうまヨ。お孫さるハ。お義くへ
十三を改めゝ。丁ど七人ごうまうハナ。それどうもホシニ
内ハ火ル場のやうで。お孫んぶもろくふ。生まれんのサ。
お孫ア。でようぶうまも。おてきんアレ。あの娘が
髪のうちの。放蕩令嬢の妹ど。そふく

能標致ゞ移ゝ。息子どのもそふ〳〵。酌當ふあつさそのだゆへ。

[表] そつぢとサ。氣の毒千万ゝ。[三] それも此サ。さん

代ごろ。故鬻も搭別身がへのサ。ぜうかの。ぞうさ完行

きうの。身上ぢやア。ぞうふさ。ぞうふさ。高の知れさ端ト金。そき

ぞうアこ氣ぞうへの移ゝ貧乏の方が。徘徊の。[表] 堂ゝ似て

種を移せといふ。ぞうふ〳〵とも氣が大きいのヨト。ひ。ぞうふ

ぞうぢ

ぞう言ちひとく。要の差云ぞうぢ〳〵。ぞうさ。ぞうぢ。ぞうぢ

ぞう會。火鉢をまん中へ居く。煙草を吹あがら。ぞうぢ

前上 十三

契月も御伏僧さあと。御聽聞致〳〵こがイヤ。ぞうぢ

かぞうぢごろまの。[図] ぞう何所へ入ッちゃいまあ〳〵さ。[図] 扇ゝ谷の

冷風寺さあで。御靖待がごぞうほさ。[図] まあ一向ぞんど

まあんで。錢念ぞうを錢〳〵ほしさト。ぞうをいえへ影のさひ

おそらきあ御土と。案内ふまさひ亭を萬助。見世さ知く

迎ひよ出。御内佛の前へ靖待〳〵。[図] 今晩いあうがぞう

ごぞうまの。[賀] イヤ大きふあそく。ぞうまー。さご御同行元も

お移ぞうぢごぞうはさらう。[同] 今勉へ有難ごぞうまの

ぜんぜんたる方外の女ぐうあふく。ひまをうかがひ茶をぐそ。[鬻]番僧よ持せ〜菅の
中より。加衣袈裟を出〜くかける[万]御膳いうぐどぐるまの。[画]
跡よ〜〜〜。まづ御蠟燭よいと〜〜ませう[万]さあうあいと。内
佛の障子を開き。香を捻て輪燈を挑げ。朱蠟をあつる
さあへ拝さく。尼ときくより拝をあり。實よ信心荘厳みよる
とりや。明珠光ふ飾立て。光輝や〜光景ハ。阿弥影向の心
地〜〜。おのづ頭を俯低つぐあぐら蚊の群ぐるぐるき声
を發て。い〜同音よ御經ぐたとまりるる。是より引續く

暫時法談の間信心了解の們ハ感涙を流して。佛恩
報謝の称名を唱えぬ。其信を得ざる者ハ人の脊中
を。枕とし。畳よ額を押付て。夫あり〜るふ眠るもあり。
御文章の声を聞て。殘て惜やといよ者あれば。やし嬉〜やト
懐中の。竹の皮を廣ぶ。剛飯同行。犬門徒。首巻
ゆと。乱呑子ぐ〜。御菓子を瀬ノる。漆屋の内義御
取持と〜多よ〜〜〜。二ッも三ッも鳥屋の爺。いとまごひ
さく。そと〜よ表の方へ立ちね[ヒ]おくさん出ふをるさう[ヒ]

アリヽ此ぞヨ 丙 冷風寺さまの。御勅化も中〳〵。あり
がゝい 乙 さかうサ。今夜ハ御叮寧な。剛飯よ麦メやぐ。
てく〳〵ふるまをア移く 丙 明日の勉ハ雪の下の萬福屋
長兵衛ぞのら。御蠟燭ぞ。これも御菓子い叮寧サ去年も
饅頭ぞから。今年も大方まんぢゝであらよ 乙 そりやア。あ
るを亟ても。拙まりヤサざアあるめく 丙 それよ蕎〳〵立の。
温笠竜のゞ出まるヨ 乙 それい〳〵い移いるゞ也く今夜の剛
飯も。弱和そのゞ佳味そのゞト。法義のるい服道へ曲ゞく

家路よ飯ヨる。斯〳〵利徳屋。萬助ゞ家門出。よほぎ
冷風寺へ。膳を出〳〵酒を進め。女房お福。娘阿徳も給仕
ちゝあぶら。御相続の法義を悦びる。追〳〵参詣の人〳〵も
退散して。今ハ家門の們ぞろ。裡上ハ親子三人の外。人
あるれべ 丙 偖氣の毒ふ方あるハ。福次どの〳〵式でぎるテ
定やく。ハ勅命あきるとハふも。能〳〵のるさい存ぎる
ゞ。今ハ残念でぞら〳〵 丙 〳〵ハ推薬ちきれま。我ゞの
るゞでぞうまれれ。ふを智品を智。美見智るも敢〳〵く

ゑんまーたれども。心ある肝曲邪の根情ゆへ。親を親とも存
ませぬ。悪くのふてだら。世間の人さへ對ーはしても。ぞつる
も捨て。ゆるれぬ義理とあり。二つあれども。如何なる身よ。災
難でもきまりよくよみるがごとく。跡のなく哭のたなひて
侵くよ。あきき昔と諦て。いろそのるふ勘當其。契分の苦接
と思ひきう親子の縁ハきうはしられど。雪の夜やふ孝老
わが。居所トカス發句の通り。契寒くそを見るよ月とも。
ア阿奴めハ一躰ろ病分ろの。定やく薄気でぐろい

何所ふ。そふーく居おるから。風でも引く死ふおらふト。片時
胸ハ忘ません 和 至極也最意子方。そこが血筋のかやる子
同士まふ月でも御法義を。おまろとびあきれよ。諸佛念衆生
衆生不念佛。父母常念子。子不念父母ト經文ハ說ま
ぐく。仏の気せを知ふわどふ。気せを知ふぐ。親ぐ子を
ありふわどふ子ハ親をありふぐ。濃まーいるのでぐるテ 万 ア
有がらふぐごうまる 与 かくーあそはふも。聞あとぐーまも
通りの。恥堂でぐうまるバ。捨てくあきるのーくたうち。

ゆく〳〵は世間おそくわゝ。奈何憂目をかけやうも。終身まもぜず種〳〵思ひ過〳〵そ。あく又まを捨てどうぶく獨ゐ換らまぜん。此世ゐふ親は。苦労をかけるといふもよく〳〵ゐ不孝る奴でこざりまゝ。故に世が親とあつ。子とせれくぢうほさのでこざりまゝ。善惡ともゑ不定のでこざりまゝ。

和 因果應報の理ゑ。

世の中。能とりゐく憑〳〵ゐもちゐ。兼とりゐく敢く捨られもせず。禍福吉凶。その身の持ちゐれば。たとえ親ゑ勘氣を受られべとく。亦世ゐ必ゐるも。世間ゐ信

有ると。でこざれば。能耳を傳聽ゐきるゆく〳〵ゐるも。有ゐ。ともゆされぬテ。

和 そゐ。ゐく呉るべ。親の恥辱も雪ぎまゝが中〳〵。渠奴が根情でい。そも人間ゐ。あるまぜ。

男の子い。不好でこざりまゝ。ゐく成おとくゆゐ。

実躰ゐ聟でもそく〳〵。かゝりまゝ。あむゐ。ゐこだぶつゝく。

和 兎角血氣の附燒吸で。跡先の考もゐく。身を果ス。

も。知らぬ流〳〵とやられとゐるテ。ゐ三日以前でこざるさ。ゐ。ひまく方へ見くられく。今子を借用ぜ〳〵たいゐる。

ゆくふ程上へ通〳〵て。遣ま〳〵おぶやぐ如何ゐ容ゆくを
恥のまゝ撫子おく。定めくれ聞ゆるぶれも。あられほこで
こざうまをう。私爺も親ゐ親ゐ尚ゐされ。只今ゐやま〳〵
とい。居途立途まも迷ふ仕合せ。丈〳〵の金子ゐともこざれ
べ。身の在付所もこざるゆく。御義悲と思いゆうう。金子
一手ゐ借度とのるゆく。夫らら某も段〳〵とりほこさ。さても
偖も其許い不了簡ゐ人でこざる。実躰まゝて居るれば
利徳屋の若擅那。一あヤ二ゐの金ふ。差支て人ふゐを拵

誤ア入く。合かりゐまゝゐるりこざくね。必竟其許の身
持ゞ。放持かくねゆくふ。親者も家を思ひ世間の義理を
知りゆ。勘尚も殺されさ。其でこざくふ。譬ゐる盗賊まを
子ゐどゐやの身ゐ取とい。尚不便ゞまをとヤス。通りゐやい
中〳〵勘尚を義。氣いゐれども。子のゐ〳〵から。勘尚して
貰ひたいと。ゐねだりのるを。仕出をゆくふ。後とゐやい
ゐぐら。逃かん尚も懐の種。両親ゐ苦労をうけ。嘆きを
かける。四討ぐうんま。其許の身ゐ酬ひ。能るゆい迚もこざくね。

契うくいに。志度心を改めく。人の顔を見返さやうふ。さん
ざうあきれ。とふ其躰ふ。零落容をく。契鎌倉を
俳徊いさきれとい。いよく親の身人。泥を壁同前幸ひ。
智音のうの。京師坊門通り。御池町ふどれが是が方へ
尋ね。伺られて。先一手お手も。奉公結されよ。ぶんく呉
見給へ。たら。涙を流して身の戒悔。さうふもいわさらば。
徴ふ有難き。御義悲といれさゆふ。さろそく書状
ちくめく。旅の路用も。ち。衣類も。じが。ぶ智させと

ちほさゆ。大方京都へ行きさでござら〜 [丙] 海をまを
が。實の心底ふく。人間ふまりまれば。渠が仕合せおあさ
の。御義悲有がらふござうまを。 [丙] ちんふ人さふ。恨ふごぎ
ア。ません皆ひさく〜とも。因果でござうまを。 [和] さふく〜
善るふ分。ゆひるふ分ても。契世い暫く。仮の宿
後生の一大るぶ。大切でござうテ。あかごぶく〜。
ちひ御相続でだいぶん夜も。更ま〜さらく。 [万] イヱく。まご
さふごも。ござうません。 [和] イへく。古家内でも。さぞ。お眠らふ

利徳屋福助
暴勢ふるひ
吾家に忍入
貨を盗み掠
退去る

あまぶくと内佛よ向ひ拜をして。番僧もろともいとまを
告げて。冷風寺へ飯まうす。後の世の苦しきるのを。思へば
仮の宿まと。何あげくらん。利徳屋万助へ今宵もうもん
藻の。御取越をはとあて。心よ殘る方あれど。たゞ不便
あれへ。躰福分ゞ多のうへと。案じゝ胸もゝ少の間。妻
の。おふくも尚更ふ。冷風寺のうはを聞。いよ〳〵上方へ
登まつる。嬉しい憂ひくりの。難面りのと。聞さへあるふ只ひとり。
心がらとはいひあぶら。哀や悲〳〵ありふらゝと。眠つるも不ね

床の中。寝さうしても寝付まね。親子の血もゝぞ。有難き
係る情を他とは。天魔外道の。利徳屋福分。恥をもぢ
とも。ぐれがいよ〳〵。逆増もほ。智音識人。親類縁
者。手の届くたけ。欺衒ろく。且那寺の和尚さへ。偽謀
儻偶。暴逆徒今い金の蔓きれく。詮方あるふ忍び迎
家い物の目が。親の理。御取越の混雑を。見ふ附入宵
の暗。家空地ふ。儚届て。寝息を暫〳〵かぎの。宮盗こゝ
〳〵土蔵へ這より。掟条念あふ押明て。まんまと中へ

恐びへり。金の有所い契あるう。彼不あるうとよ探りふ。撥り
巡る藏の中。萬助い胥のわど。散乱ア上と見らる。福女ぶ容
ムあぶぶと氣をゆるさぶ。寝さうして容子をアれば安ふたが
ね。土藏の中偖も淺ましや。盗賊ふあぐあるうさうと。お移ま
せ紀来ア涙ま咽び。ねらぶ出る咳一ッ。藏の中でい南無さん堂
親父めぶ目を覚せーうと。不驚不怖肝玉の大きもこふうる
ぞじ。妻のおふくも寤さふしそ。やうまい知ぶど我子の化業
家内の者の知らねうち。ふあふ盗んで逃てあよ。ろうのうちよ

うちふ思ひ子の。愛淫い母の常ありうる。福女い十分ふ藏の
中ふ貯へあり金を。残らぞ盗ぶうう。新ぶくまいとうろうんで。
何所へう逃去ぶる。甚夜天明ぶく家内の者ども。これをアれ驚て
スハるうこそあれと。土藏の入口開きあるうよしを。萬助ふ告ぶれば。
万吹も暫ー。驚きー躰ふ躰ふりうこそ。早速土藏の中ふ入ッて
見まぶ。貯へ金ー金アくさるゆ。偖い盗賊の為ふ擄掠ー。
今更何ぶぶよ。悔ふも詮ふー。是皆吾不運ありと。諦め
言葉ふ。家内の者も只。愕然ふ驚神呆ぶ。万吹ぶ豪気の

ゐどを。感ふあるべく斯て萬助は。是まぐ禍炎が多の放捗
ふ。數夏の金を入揚。そのうへ貯へ有きまゝ金をぬすみ盗を掠き
しも。吾子福炎ぶ作業とおりくべ。片時も浮世の義理まから
まりて月日を過ぐ心もあく。家名の煙をを長く立んこそも
あるれば娘おとくを。何所へありとも縁付て后は。二十四輩の御
旧跡須拜あゝて心安く往生をとげゝと思ひ立られば。女
房おふくも禍炎が悪逆の作業を見るに付けても。契家屋
浦を。娘おとくふ儀るべき心底なく。吾倆ぶ志意も爾

前上廿三

あるとて。夫婦相談のうへ。おとくが多の片身ぶき。縁を求め
多彩。爰ま聖の下ある。萬禍屋長兵衛も。念佛の御同行
あれば。利德屋萬助とも。無二の懇心あく。互ひ法義域
悦びる。因ゝく長兵衛ぶ躰。玉五郎も祈ゝ。利德屋がこえ
来るく。おとくぶ嬌態貌るも。が口く新り居られば女房ふ
らひたゝといふ。吾兵衛も同宗旨のるゆでらあり。萬助と
心安き仲。或日来るく契るを演舌ゝられば。万炎も口ぶ
所の祐ひあれども。玉五郎ぶのと。同歳ゆゝて。おとくも十七才

あれば。似合〜かるまじと。斟酌あるまふ。長兵衛も心掛けたる男ゆへ。躰が得ぬで望みあれば。是非〜某まうさうじと。餘義あきるまふ。萬助夫婦も辞がたく。おとくも赤くなる玉五郎が美男あるまふ。知らず〜とゆへ相伏さうもく調べて互ひに結納をとりかへる丙何もかもよく落のぬく甲〜ふ。氣を附てやらうせヨ向へ行てからコレが豆ぬくとりのが有ちやア。おまヱが不自由ざ丙さんま能ざうまふ。白の重箱の夾通り。色〜の時忘るのが是近所を識人ふ過ること

前上廿四

忘るのが是里びくきの時忘るのが親類方をまわること忘るのが是。それから石引一すまふ。夾結縮緬がこツ。それから八幡さまへでも参らうといふ時忘るのが。茶子歳茶の手忘ふ。夾結城〜ぬでも。武唐様の子持〜ぬでも。御揚よしだ次第サ。芝も夾毛切ぢやや。草板金花山よりハ一すゆやや黒繻子のやうざようこざうまふ。夏のいんきょざんの重箱筒へ入まま〜丙さそれでよ〜〜。長兵衛どのが。あの通りの氣まのざら。鈍意るをあてきちやア。お徒が

肩身が闊意昨日とりよせさ。櫛とこうがいと。簪〜ん
あれで能うの[ゑ]最上でござうまゝ先生〜さうて来〜
ほしゝ。ソノ七あの簪〜と一緒ふさ〜せく〜えほしさら。簪の
ゑうがよろやど劣まゝさら。アレト私〜の讓さほしさ。て〜を
こうがいあるのざ〜ふ移せと。やほしさ[丙]ウそれがいひく
あんでも。一生ネ一度のうりざら。外聞の悪く移くやうふ。あ新
やど。萬福屋の娶ゑどあると。世間の人ふる。云まうるうどよ
せ移び。長兵衛ざの。顔がよどれる[ゑ]そふあう寄るゆ。ゆく

前上廿五

ふも。たゝね物ちがゞ。こんな二タ通りで。きらをつゝでどざう
まゝ[丙]ウそれが能。荷を運ぶ奴ふと。内の若の任せ施
いよ〜うの[ゑ]それも殘らど。出来ほさら。渡〜て来ほ
た[丙]ウよ〜〜。荷を運ぶ日から五六日の間ハ。内ネ混
雑まるから。青善をたのりふヨのふ[ゑ]それが能ざうゝ
いがき。十人と二十人い。毎日お客もどざうまゝト。裡の混雑
大方ありば。万助も負ぬ氣の男ゆ。今般おとくが婚礼も
是見〜くられると云ぬざうふ張ぢんで。十分ふ支度を

さをとよみ〳〵吉辰の日をえらびて。娘おとくと萬福やもえ
ば。鮒の玉五郎と。目出度夫婦の縁を結ばせ給ふ。
是迄両個八。十七年以前。かの夢世法師が。鶴ケ岡の
神前より抽ぬく。俱生神の告を聞し。子供なるわ。
先諸行無常。是生滅法の。文附合は。亦種この
物語ぞ。起るる。

玉散袖上巻畢

若山 山田屋伊助 書林

前上廿六